

ページ	INDEX
1	大学博物館等協議会2011年度大会・第6回博物科学会開催報告 (名古屋大学博物館 館長 吉田 英一)
3	宮城県における文化財等レスキュー活動：東北大学総合学術博物館の救援活動 (東北大学総合学術博物館 佐々木 理)
5	吉崎誠海藻コレクション 震災と標本レスキュー (名古屋大学博物館 学芸員 野崎 ますみ)
7	海事博物館第7回企画展と第5回市民セミナー 「大航海時代から人工衛星まで－航海術と計器の発展－」 (神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館 副館長 矢野 吉治)
8	2011年度愛媛大学ミュージアムの活動 (愛媛大学ミュージアム)
10	広島大学総合博物館と同埋蔵文化財調査室の統合と特別企画展の開催 (広島大学総合博物館 埋蔵文化財調査部門 藤野 次史)
11	京都大学総合博物館2011年特別展「花の研究史—京都大学の植物標本」 (京都大学総合博物館 准教授 永益 英敏)
14	協議会加盟館の活動予定(平成24年度) (愛媛大学ミュージアム、金沢大学資料館、九州大学総合研究博物館、京都大学総合博物館、 神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館、東京藝術大学大学美術館、名古屋大学博物館、 宮崎大学農学部附属農業博物館)

大学博物館等協議会2011年度大会・ 第6回博物科学会開催報告

名古屋大学博物館 館長 吉田 英一

大学博物館等協議会の2011年度大会、および第6回日本博物科学会が2011年6月23日(木)・24日(金)に、名古屋大学の野依記念学術交流館で開催された。協議会を構成するのは、国立大学に付設する博物館・資料館・美術館・植物園のほか、国立科学博物館や国立民族学博物館等を含む39の加盟館で

ある。博物科学会は、協議会加盟館の教職員とそれ以外の個人が参加し、博物館収蔵の学術標本資料等を用いた基礎的・応用的研究、教育活動を行なっている。2011年度の両大会には、協議会加盟館以外の機関も含む40以上の機関から110名ほどの参加者があり、特別講演会、研究発表会、見学会(名古屋大



萬谷宏之企画官による特別講演



野依記念学術交流館の大会会場



ポスター発表での活発な意見交換



ノーベル賞展示室を見学する参加者

学博物館・年代測定総合研究センター)、意見交換会はいずれも盛況であった。

大会初日の特別講演会では、文部科学省生涯学習政策局社会教育課の萬谷宏之企画官が、『新しい「博物館に関する科目」について』という題目で、大学博物館の教育活動にも深く関わる学芸員養成課程の2012年度からの改定内容について詳しい解説を行った。もう1つの特別講演では、名古屋大学年代測定総合研究センター長の中村俊夫教授が、当センターのこれまでの歩みと共に名古屋大学博物館との共同研究活動について紹介した。

特別講演会につづき、博物科学会の研究発表が行われた。22編の口頭発表と13編のポスター発表では、東日本大震災によって被害を受けた宮城県南三陸町「歌津魚竜館」や東北大学附属図書館・史料館の復旧作業について報告があったほか、大学博物館の可能性や社会的意義を検討すべく、地域連携活動や、最新の展示手法・標本情報化の技術の紹介、

教育活動の取り組み、そして収蔵品を用いた学術研究について発表があり、活発な質疑応答が行われた。

協議会加盟館の館長会議と実務担当者会議が1日目に行われ、その結果を踏まえて2日目の午前に総会が開催された。協議会総会では2010年度決算と2011年度予算案と共に、次回協議会の京都大学での開催が承認された。また、平成23年度の会長校が名古屋大学、副会長校が鹿児島大学と大阪大学、監査校が東京藝術大学に館長会議で承認されたことが報告された。そのほか、震災等における博物館の危機対応について実務担当者会議で討議された内容が報告された。博物科学会の総会では、入会申込者に加えて、北海道大学総合博物館元館長の藤田正一氏の名誉会員への推薦が審議され承認された。後日、藤田会員には名誉会員推挙状が送られた。また、博物科学会の次期会長として、名古屋大学博物館館長、副会長として鹿児島大学総合研究博物館館長および大阪大学総合学術博物館館長が承認された。これら総会の議事録は、後日、加盟館に送付された。

最後に、大学博物館の相互連携を深める貴重な機会となった本大会への参加者と関係者の方々へお礼申し上げる。



名古屋大学博物館の見学会に集う参加者

宮城県における文化財等 レスキュー活動：

東北大学総合学術博物館の救援活動

東北大学総合学術博物館 佐々木 理

はじめに

2011年3月の東北地方太平洋沖地震によって引き起こされた大津波は東日本の太平洋岸地域に大きな被害をもたらした。東日本大震災では多くの博物館等も被災したが、とくに三陸海岸沿いでは津波によって多くの資料標本が破損し、流失した。東北大学総合学術博物館は、2011年4月より文化庁東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業の宮城県三陸海岸沿いの自然史系施設のレスキュー活動に参加した。12月にはいり被災地での活動が落ち着くと、活動は被災資料の保存修復、保管環境の整備に移行し、その後「宮城県被災文化財等保全連絡会議」に引き継がれ、2012年4月からは文化庁「被災ミュージアム復興事業」の支援を受けて現在も続けられている。ここでは南三陸地域の博物館等の被災状況・レスキュー活動について簡単に報告する。

南三陸地域の自然史ミュージアム施設の被災状況

宮城県南三陸地域には、気仙沼市の岩井崎プロムナードセンター、南三陸町の歌津魚竜館、石巻市の雄勝公民館、女川町のマリンパール女川、石巻市鮎川のおしかホエールランドおよび鯨類研究所鮎川実験所などの自然史標

本収蔵・展示施設があり、津波により被災した。

岩井崎プロムナードセンターは、岩井崎石灰岩がつくる半島の基部にある。一部3階建ての建物の2階天井付近までが水没し、建物骨組は残ったが、内部はほぼ完全に破壊され、標本類の多くは失われた。同センターには地元気仙沼のペルム紀化石標本や岩井崎石灰岩の岩石標本・薄片を中心に数10点の地質標本があったが、5月21日の調査で回収されたのは腕足類など10点のみであった。回収された標本は、気仙沼市に返却された。

雄勝公民館は、雄勝湾から200mほど内陸に入った河川沿いの低地にあり、2階建ての建物全体が水没し、壊滅的な被害を受け、屋上には流された観光バスが残置している。2階に展示室があり、雄勝地域で発掘されたウタツギョリュウ（レプリカ）標本等が展示されていたが、5月18日の調査の際にはウミユリ石灰岩の標本1点のみが確認された。

マリンパール女川は漁港の海岸から数10mの位置にある。道路をはさんで水産観光センターと水産物流通センターからなり、前者に各種の展示があり、1階にこの地域に関連する化石展示コーナーが東北大学総合学術博物館の協力のもと設置されていた。この地域は地盤沈下が著しく、満潮時には2つの建物の間の道路は海水に浸る。マリンパールは3階付近まで冠水し、展示室の内部はほぼ完全に破壊された。しかし、5月18日の調査で、重油混じりの土砂の流入はあったが、化石展示ケースの破損は軽微であることが確認され、



図1 気仙沼市・岩井崎プロムナードセンター：
撮影 根本 潤・2011年5月21日



図2 石巻市・おしかホエールランド：
撮影 根本 潤・2011年4月28日



図3 南三陸町・歌津魚竜館：撮影 根本 潤・2011年4月4日

6月21日に約50点の化石標本すべてが回収された。化石標本は東北大学への搬入後、合成洗剤等で洗浄した。

おしかホエールランドは、牡鹿半島先端に近い鮎川漁港に面した低地にある。2階建の施設2階床上まで浸水、1階展示室には多量の瓦礫が流入堆積した。1階展示室には多数の液浸標本が展示されていたが、2体を残し流失した。2階天井から吊下げられていた鯨骨格標本は肋骨の先端まで浸水したが、流失を免れた。また、2階展示室の標本類は津波による被害は受けなかった。2階展示室の標本は、仙台市科学館へ搬入され、保管されている。1階展示室の液浸標本は国立科学博物館に移送された。また、骨格標本は西尾製作所（京都市）に移送し、洗浄保存処理等が行われる。

鯨類研究所鮎川実験所（旧ホエールランド）は鮎川港にあり、平屋の建物は完全に水没した。保管されていた冷凍標本はすべて損壊し、骨格標本は散乱した。骨格標本はおしかホエールランド2階展示室へ搬入され、西尾製作所（京都）への移送が計画されている。

魚竜館は、伊里前湾北東奥の元の海岸に露出していた露頭を覆う露頭保存施設（狭義の魚竜館）とその前面の埋め立て地に立つ水産振興センターからなる。津波は水産振興センター2階屋根を大きく越え、建物全体が完全に水没したが、展示標本類の移動は展示室内にほとんどどまった。4月4日の予備調査以降、数回にわたる調査とレスキュー事業が行われ、50数点あった魚竜、アンモノイド、貝類等

の化石標本は、2点を除いて回収された。また、考古・歴史・民俗資料も、東北大学埋蔵文化財調査室により一部をのぞいて回収され、南三陸町に返還された。残置されていた大型魚竜標本および和船は、10月30日～11月1日に大型クレーン車を導入して搬出した。回収された標本のいくつかは破損し、修復が必要な状態にあった。特に大型のジュラ紀魚竜化石は早急な手当が求められていた。そこで、地質学会と東北地質調査業協会の支援金を用いた修復作業の結果、現在、仙台市科学館においてベザーノ産三畳紀魚竜標本と展示されている。なお、歌津魚竜館および魚竜標本の意義を広く知ってもらい、魚竜館の復興を目指すために、2012年2月6日～3月25日、被災標本や関連標本を加えた企画展「復興 南三陸町・歌津魚竜館－世界最古の魚竜のふるさと」（仙台市科学館・南三陸町と共催）を、仙台市科学館で開催した。

今後の課題

震災から1年が経過した現在、被災地からの文化財等の救出作業はおおむね収束しつつある。しかし、津波被害による膨大な量の水損資料をはじめ、応急措置や経過観察を要する資料が日本全国の博物館施設等で一時保管されており、今後も長期的な対応が必要である。また、被災地では保管施設や専門職員が極度に不足しており、ミュージアム施設や教育活動の復興には、さらに長期的な支援が必要といえる。

吉崎誠海藻コレクション： 震災と標本レスキュー

名古屋大学博物館 学芸員 野崎 ますみ

名古屋大学博物館では、「吉崎誠海藻コレクション 震災と標本レスキュー」を2012年3月10日（土）から4月14日（土）まで開催した。これは、中日新聞の共催、大学博物館等協議会、東邦大学習志野メディアセンターの協力をうけて行った企画で、期間中の入場者は2,499人を数えた。

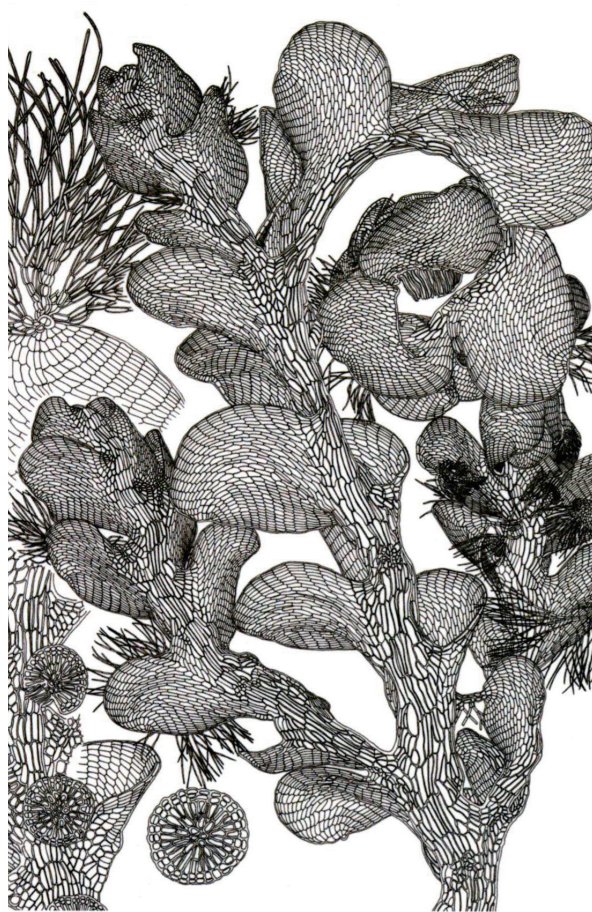
企画展のタイトルにもなっている吉崎誠氏は藻類の分類学者であり、生涯をかけて国内外8万点を超える藻類の標本を収集した。その内の181点が教育標本として2005年3月に名古屋大学博物館に寄贈されている。吉崎氏は、この国内2番目の数を誇るコレクション（個人で集めた数としては世界一とも言われる）の受け入れ先と研究拠点として、海藻の主な採集地のひとつである岩手県の山田町

（鯨と海の博物館）を選び、2011年3月7日に運び終え自宅に戻った。4日後の3月11日に東日本大震災による津波が襲い、寄贈した8万点の標本や顕微鏡類、文献類が流出し。その後、山田町職員や岩手県立博物館職員等の標本レスキューにより1万1千点余りが救出された。

この企画展は、吉崎氏が分類学者として描いた芸術の域に達する藻類の顕微鏡スケッチと名古屋大学博物館に寄贈された標本とを中心に展示し、来館者には、「標本の持つ価値」と写真ではなく「標本をスケッチする重要性」を改めて考えてもらう展示とした。また、海藻標本のレスキュー活動や救出された標本、当館スタッフが参加した陸前高田市立博物館への標本レスキュー活動もあわせて紹介した。なお、この企画に対する来館者の関心の高さには、展示担当者も驚くばかりで、吉崎誠のコレクションのみならず、「自然史標本管理の現状」や「標本の管理や研究に対する博物



海藻コレクション展の入口



海藻標本顕微鏡画（吉崎誠による）



名古屋大学博物館に寄贈された海藻標本の展示

館の役割」までも理解されたと思っている。

また、3月31日（土）には、関連イベント「海藻標本を作ってみよう！」を開催し、子供からシルバー世代まで36名の参加者があった。吉崎氏の教え子である藤田隆夫氏（日大習志野高校教諭）を講師として迎え、新潟大学佐渡臨海実験所から届いた海藻で、紅藻、緑藻、褐藻標本を作製した。参加者からは、作製した標本を持ち帰り、乾燥した後にラベルを書き込み、きれいな標本に仕上がったとの連絡もあった。このような機会に1人でも多くの方に博物館や標本を身近に感

じてもらえることを願う。



海藻標本の製作体験の様子



ギャラリートークの様子（レスキューされた標本の前で）



体験製作された海藻標本

海事博物館第7回企画展と 第5回市民セミナー 大航海時代から人工衛星まで ー航海術と計器の発展ー

神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館 副館長 矢野 吉治

海事博物館では和船から近代に至る大小の船模型などの常設展示に加え、毎年、日本財団の助成により海の日を記念して企画展を開催している。平成23年度は7月15日から10月28日の間、『大航海時代から人工衛星までー航海術と計器の発展ー』と題して第7回企画展を開催した。15～17世紀にヨーロッパ人が帆船で大洋を渡り、アジアやアメリカにいたる新航路を開拓して世界各地に進出していった時代から近代に至る航海術、航海を無事に達成するために考案された様々な航海計器、当時の世界地図や現代の海図などを取りあげて、人類の驚くべき「知恵と技術」発展の軌跡について所蔵する資料を一挙に公開した。また、この企画展では次の特設コーナーを設けて展示物を解説した。

1. 【シンボル展示】「船首像」：朝顔丸の女神像

帆船の全盛期には趣向を凝らした船首像が登場し船を飾った。この習慣は近代まで踏襲された。

2. 【海の信仰】：和船の絵馬

古くから「沖行く船は帆を下げて礼拝」という作法があるくらい人々は大自然に対して畏敬の念をもっていた。「絵馬」を通じて当時の厚い信仰を回顧した。

3. 【航海の歴史】：遣唐使船と咸臨丸模型、歴史年表

紀元前から1900年代までの航海術と航海計器の考案や発明などを歴史年表でたどった。

4. 【航海計器】：クロノメーター、磁針儀、六分儀、アストロラーベ、ハンドログ等

当時の航海で実際に用いられた機器類の実物を紹介した。

5. 【航海の安全】：航路標識の部分実物とモールス信号練習機等

船が自分の位置を知り、安全に航行するためには道しるべが必要であり、灯台は航路標識の代表である。また、「モールス信号」や旗などの通信手段を駆使して情報の伝達を行った。

6. 【国際信号旗(国際旗りゅう信号)】

船舶通信の一手段として今でも万国共通で使用され、アルファベットの文字旗26枚、数字旗10枚、代表旗3枚と回答旗1枚の合計40枚で構成される。旗にはそれぞれ意味があり、これらを組み合わせることで様々なメッセージを表すことができる。

7. 【進徳丸】：進徳丸の模型、写真と絵画、タイムベル、処女航海のアルバム等

1923年に神戸高等商船学校の練習帆船として建造され大海原で活躍した。1963年の引退まで世界を舞台に活躍する数多くの船員を輩出した。

8. 【船の操舵室(イメージ)】

博物館内に船の操舵室をイメージして再現した。

9. 【航海の新技术】



海事博物館



朝顔丸の船首像



航海計器の発明

電子航海機器や衛星通信機器は航海の安全に不可欠である。船の現場で活躍する実機を紹介するとともに、実際のレーダ映像や船舶自動識別装置(AIS)による世界の様々な海域におけるリアルタイムな船の動静を大型ディスプレイで紹介した。

なお、当館は毎週月・水・金曜日の午後が開館しているが、会期中の来館者は974人、1年間の来館者は1984人で、ボランティアスタッフにより案内や解説を行った。

また、10月から11月にかけての毎週土曜日の午後に神戸大学大学院海事科学研究科公開講座・第5回海事博物館市民セミナー「大航海時代から人工衛星まで -航海術と計器の発展-」を開催し250人の参加があった。セミナーの演題は次の通りである。

第1日：10月8日(土)

「大航海時代の航海術」

第2日：10月15日(土)

「航海電子機器とその発展」

第3日：10月22日(土)

「遣唐使、その航海」

第4日：11月5日(土)

「地文航法と天文航法」

第5日：11月12日(土)

「コロンブスから最適航法まで-海洋学・気象学は航海とともに始まる-」

2011年度愛媛大学ミュージアムの活動

愛媛大学ミュージアム

2009年11月に開館した愛媛大学ミュージアムにおいて2011年度は、通年開館2年度目となる。前年度が通年開館初年度であり、かつ「恐竜から哺乳類の時代へ」など大型の企画展を開催したこともあり来館者数は50,000名を超えたが、2011年度は25,000名弱にまで減少することとなった。このような状況下、少ないミュージアムスタッフにおいて通常運営を確立していくため、展示企画のあり方を検討模索した1年であった。その結果、展示の企画立案から規模・期間の大小について整備し、上期(4～7月)と下期(12～3月)に2ヶ月程度開催する大型企画展示を特別展とし、その間の秋期を中心に1ヶ月以下の短期間の企画展示を企画展として区分し、規模に応じた展示企画の募集・立案を行っていくこととした。早速、学内へ周知および企画の募集を行ったが、学内諸研究活動の掘り起こしなど、ミュージアム側からの中長期的な視野に立った展示企画の立案もまた必要である。

来館者数の減少とともに、来館動向にも変化が認められた。すなわち、企画展開催時や休日における個人あるいは家族等の小グループの来館減少で、平日の団体、とりわけ小・中・高校の団体見学が一定規模を占めるようになってきたことである。地域の学校教育における利用の定着が窺え、このような利用を一層促すために、土日限定としていた案内役の学生スタッフ配置を、2012年度から平日に重点をおくこととした。これに備えて、2011年度末には学生スタッフの組織的な研修を行うとともに、積極的かつ多様な情報発信を行えるよう、HPの体裁を大幅に更新したところである。

このような試行過程にあった2011年度の展示企画は以下の通りである。

- ・企画展「第1回 レアメタル展」(5/28～7/30・約3,900名)
- ・企画展「震災を知る－愛媛の災害史と東日本大震災－」(5/30～7/31・約

3,800名)

- ・企画展「昆虫展2011」・同時開催「さかな展」(8/5～10・4,500名)
- ・土木学会展示(9/7～10・約800名)
- ・高大連携附属高校課題研究成果展示(9/16・17・約500名)
- ・企画展「中国少数民族伝統衣装展」(10/9～27・約2,000名)
- ・企画展「微化石展」(10/29～11/7・約350名)
- ・あいだい博2011(11/13・14・約1,300名)
- ・企画展「第2回 レアメタル展」(11/26～1/28・約2,000名)

新たな取り組みとして、例年の昆虫展に同時開催した「さかな展」があげられる。附属高等学校理科部の協力を得て、休息用のラウンジスペースを利用し、松山市重信川流域の淡水魚を展示したもので、昆虫展に来館した低年齢層を中心に好評を博した。そのうち大型の水槽3基は常設展示化し、休息用空間に

新たな雰囲気を加味することとなった。

比較的大型の企画展示として実施したのが、2回の「レアメタル展」である。レアメタルに関する社会的問題が提起される中で、レアメタルとは何か、そして愛媛大学における研究がレアメタルとどのように関連しているのかを示すことを意図したものである。東日本大震災をうけて急遽立案された企画展「震災を知る」とともに、大学研究の社会的意味を問う展示企画であった。

さらに、愛媛大学が交流協定を結ぶ中国中央民族大学所蔵資料による「中国少数民族伝統衣装展」は、愛媛大学における国際連携を展示によって具体的に提示したもので、日本国内では35年ぶりの貴重な展観の機会となった。また、展示初日にはミュージアムガーデンで中国祭が開催され、彩りが添えられた。

展示企画とともに、ミュージアムの重要な実施事業が博物館実習で、2011年度は法文・教育・理・農の4学部から62名を受け



さかな展



中国少数民族伝統衣装展



第2回 レアメタル展



博物館実習

入れ、8/22～9/2の2週間にわたって実施した。2年目の実施となり、概ね当ミュージアム博物館実習のあり方を確立することができたが、2015年度からの新課程博物館実習の受け入れに向けて、さらに内容を吟味していく必要がある。

広島大学総合博物館と同埋蔵文化財調査室の統合と特別企画展の開催

広島大学総合博物館 埋蔵文化財調査部門 藤野 次史

2011年5月に総合博物館と埋蔵文化財室は組織統合となり、新たな総合博物館としてスタートした。統合に伴って部門制となり、旧総合博物館は展示情報・企画研究部門、旧埋蔵文化財調査室は埋蔵文化財部門となった。埋蔵文化財調査室は広島大学内の開発に伴う埋蔵文化財協議ならびに調査・研究を行う施設である。また、統合移転に伴って調査を実施した東広島キャンパスの出土遺物を中心に展示を行っており、2007年5月からは総合博物館サテライトとして、総合博物館と連携しながら普及活動を行ってきた。このたびの統合は新学芸員養成プログラム実施に対応するためのものであるが、これまで各部門が独自に行ってきた活動の強化とともに、広島大学の研究・教育と社会貢献に一層力を発揮できる体制となった。

旧埋蔵文化財調査室は2011年4月1日に設立30年を迎えたことから、埋蔵文化財調査部門では設立30周年記念企画を計画し、東広島市教育委員会と共催で、2012年1月

31日（火）～2月19日（日）（合計19日間）に特別展示会「広島大学の遺跡と西条盆地の中世遺跡」、2012年2月5日（日）にシンポジウム「安芸地方の中世を探る－中世前期を中心として－」、2012年2月11日（土）に文化財講演会を実施しました。特別展示会は東広島市市民ギャラリー（会場面積約85㎡）で、1月31日（火）～2月5日（日）にプレ展示会、2月7日（火）～2月19日（日）に本展示会を実施した。プレ展示会は広島大学内の遺跡出土品を中心に展示を行った。広島大学東広島キャンパス内には約30ヶ所の遺跡があり、旧石器時代～江戸・明治時代に至る各時代の遺構・遺物が発見されている。また、近年では広島市霞キャンパスで明治末～昭和時代の旧陸軍兵器補給廠の遺構・遺物、縄文時代の遺物などが出土している。それら大学内の出土品を時代ごとの特徴を示しながら展示した。本展示会は、第1部広島大学の遺跡、第2部広島大学の中世遺跡、第3部西条盆地の中世遺跡の3部構成とした。第2部、第3部が展示の主要部であるが、第1部が展示会への導入部、第2部を橋渡しとして、第3部へ繋げる構成である。第3部では、「食べる」「調理する」「貯める・蓄える」「茶を嗜む」「遊ぶ・戦う」「弔う」の6テーマを設け、中世の日常生活がイメージできるように展示した。本展示会は好評で、報道機関の取材とも相俟って延べ1141名の来場者があった。特別展示会に連動する形で、本展示会中日に文化財講演会を隣接する御園宇地域センターで実施した。講演は、「広島大学の遺跡」（広島大学 藤野次史）、「西条盆地の中世遺跡」（東広島



シンポジウム



講演会



展示会

市教育委員会吉野健志) の2本で、60名を超える多くの方々が参加された。

シンポジウムは東広島市市民文化センターで実施しました。シンポジウムも特別展示会に連動する形で企画したもので、とくに中世前期に焦点をあて、広島大学の主要施設が位置する安芸地方(広島県西部)の特徴を考古学資料の検討を通じて探ろうとするものである。シンポジウムは、第1部安芸地方の中世遺跡、第2部土器から見た生産と流通の2部で構成し、最後に討論会を行った。第1部では安芸地方の地域ごとに中世遺跡の様相を紹介し、第2部では安芸地方と周辺地域(備後、備前・備中、長門・周防、伊予、博多)の地域的特徴を出土土器の面からまとめた。討論会では、在地産土器、搬入土器の組成や分布などの検討から安芸地方の特色を探った。かなり専門的な内容であったが、約60名の参加者があり、熱心に発表や議論に参加された。

京都大学総合博物館

2011年特別展

「花の研究史—京都大学の植物標本」

京都大学総合博物館 准教授 永益 英敏

京都大学総合博物館では、毎年、収蔵標本資料の展示解説を目的とした特別展を行っている。2011年は「花の研究史—京都大学の植物標本」と題して、植物標本を対照に7月13日から9月11日に開催された。

京都大学総合博物館の収蔵標本資料のうち、植物標本は点数で約半分にあたる130万～150万点ほどにもなる。日本では東京大学、国立科学博物館とならぶ最大規模のコレクションだが、明治10(1877)年に設置された東京大学や国立科学博物館の植物標本館にくらべると42年も遅い大正8(1919)年になってようやく植物標本の収集が始まった。大きく出遅れた京都大学が、どのようにして充実したコレクションをつくりあげ、日本における植物分類学の研究拠点として発展してきたのかが今回の展示の大きなテーマである。

本展示では、大正8(1919)年に助教授

として着任し後に植物分類学講座の初代教授となる小泉源一と、その弟子である大井次三郎、北村四郎らの約50年にわたる業績を軸として据えた。彼らの国内外における活発な調査、研究成果であるモノグラフ、フロラ（植物誌）など、研究の展開と収蔵品の拡大を対応させることにより、単に植物標本を展示するだけではなく、歴史的資料や手稿などもあわせて、標本が人と時代にどのように関わって集積されてきたかが理解できるように努めた。

この時代の重要なコレクションのコーナーには、生物学教室設置時に関西財界人が購入し京都帝国大学に寄贈されたフランス人宣教師フォーリーの大コレクションや、田代善太郎標本の購入寄贈に関する当時の資料も展示した。フォーリーのコレクションは当時の日本の版図ほぼ全域から40年にわたって集め

られた6万点にもおよぶもので、海外の研究者が日本の植物を研究する上で基づいた重要な証拠標本である。このコレクションの寄贈は遅れていた京都大学の研究基盤を一気に押し上げるものとなった。さらに西日本を中心とした田代善太郎のコレクションが寄贈されたこと、そして第二次世界大戦前の領土拡張時代に京都帝国大学が外地に有していた広大な演習林を中心に得られた植物標本により、京都大学は日本とその周辺地域のまとまったコレクションを短期間につくりあげることができたのである。

京都大学が新しく取り組んでいる「研究資源アーカイブ」に集められたさまざまな時代の探検映像資料は、まさに標本資料の背景を伝えるものである。映像にとどめられた時代と場所で採集されたものが、現在も収蔵され研究に利用されている標本として存在していることを対応させて展示することで、長年にわたる標本採集と集積の努力を伝えることも試みた。動画は『京都大学探検部トンガ王国調査1960年6月～11月』など3編を上映



特別展ようこそ



永益准教授の解説(内覧会)



展示会場の様子

しました。さらに京都大学学術情報メディアセンターの協力を得て、押し葉標本の作製の実際を採集から収蔵に至るまでをまとめたビデオ『押し葉標本ができるまで』を制作し上映した。趣味の押し花づくりとは一味違う研究用標本のつくりかたは、多くの方々に興味をもって見ていただけたようである。

博物館の標本には収蔵室に静かに眠っているものというイメージがどうしてもつきまとう。現在も活用され、拡大を続けるコレクションの意義を伝えるため、インターネットにより世界の植物標本館ネットワークIndex Herbariorumと国内外の植物標本デジタルコレクションが閲覧できるようにインターネット端末を設置し、自由に操作できるようにした。さらに、科学として検証可能性を保証するため、証拠標本として恒久的に保管収蔵することの必要性、また収蔵標本が新しい研究のための資料となっていることがわかるようなコーナーも設けた。

時代とともに拡大する植物標本コレクションの展示を中心としながら、人物、手稿、著

作、映像、インターネットなどの情報を重層的に組み合わせ、さらに植物標本館の現代的意義を伝えようとした欲張りな展示となったが、歴史的な視点を重視したのがよかったのか理系・文系の両方の分野の方からよい評価をいただけたようである。解説パネルの文字を少なくし、サイズを大きくしたことも評価につながったのではないかと考えている。



展示会場の様子

協議会加盟館の活動予定 (平成24年度)

愛媛大学ミュージアム、金沢大学資料館、九州大学総合研究博物館、京都大学総合博物館、神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館、東京藝術大学大学美術館、名古屋大学博物館、宮崎大学農学部附属農業博物館

愛媛大学ミュージアム

特別展

子どもが生きる空間ー日土小学校と松
平成24年6月1日～7月29日



昆虫展2012・水生生物展
平成24年8月4日～8月9日

輝く！ 愛大理系ウーマン展
平成24年8月16日～8月23日

三輪田米山展(第3回)
平成24年10月3日～平成25年3月31日

愛媛の算額展
ー算額から松山の数学力をたどる
平成24年10月17日～11月4日

あいだい博
平成24年11月10日～11月24日

アートとケアを考える
平成24年11月30日～平成25年1月26日

金沢大学資料館

新歓展

金沢大学へようこそ，新収蔵品展
平成24年4月6日～6月29日



企画展①
平成24年7月上旬～9月28日

特別展

金沢大学創基150年(仮)
平成24年10月中旬～11月中旬

写真展

よみがえる城内キャンパス
平成24年10月下旬～11月中旬
場所：金沢城公園鶴の丸休憩所

企画展②
平成24年12月上旬～3月下旬

九州大学総合研究博物館

特別展示

九州大学教育・研究の最前線
ー第11回P&P研究成果一般公開ー
平成24年10月19日～11月18日

松本コレクション展
平成24年3月4日～5月18日
(3/4以降の土、日、祝日を除く)

九大百年まつり
伊都に博物館がやってくる！
平成24年5月13日

闇夜にきらめく蛾
平成24年5月21日～8月31日



九大博2012ミライニツムグ 公開展示――

第5回福岡市立少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同展示
(平成24年度九州大学総合研究博物館公開展示)

「FUKUOKA子ども地球防衛隊 ―未来の地球を守るのはキミだ!―」

平成24年7月20日～8月30日

場所：福岡市少年科学文化会館 1階学習室

九州大学・福岡市合同企画展
(平成24年度九州大学総合研究博物館公開展示) (仮)

「FUKUOKA子ども地球防衛隊
―未来の地球を守るのはキミだ!― II」

平成24年12月～平成25年1月(予定)

場所：福岡ビジネス創造センター・ギャラリー (予定)

京都大学総合博物館

特別展――

京大日食展―コロナ百万度を超えて
平成24年4月25日～5月20日

春季企画展――

陸上脊椎動物の多様性と進化
―京都大学の挑戦―

平成24年6月6日～10月14日



特別展――

京都・大学ミュージアム連携企画
大学は宝箱!
京の大学ミュージアム収蔵品展
平成24年10月3日～11月25日

クニマス展(仮題)
平成24年10月31日～12月16日

マリア十五玄義図の探求展
平成25年1月9日～2月3日

神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館

第8回企画展――

船の推力発展史
―人力・風力から未来へ―
平成24年7月13日～10月27日

公開講座・第6回海事博物館市民セミナー――

テーマ：船の推力発展史(予定)

第1日 10月6日(土) 午後

第2日 10月13日(土) 午後

第3日 10月20日(土) 午後

第4日 11月3日(土) 午後

第5日 11月17日(土) 午後

(講師と講演題目は未定)

場所：

神戸大学大学院海事科学研究科(神戸大学深江キャンパス) 総合学術交流棟梅木Yホール

註) FAXまたはE-mailによる事前申し込みが必要

東京藝術大学大学美術館

近代洋画の開拓者 高橋由一
平成24年4月28日(土)～6月24日(日)
会場：大学美術館展示室2/3/4

我が国の近代洋画の黎明期に活躍した高橋由一のスケッチなどほぼ全作品を展示し、その業績を再考察する。本学の後に山形、京都に巡回する予定。



草原の王朝 契丹

美しき3人のプリンセス

平成24年7月12日(木)～9月17日(月祝)
会場：大学美術館展示室・1／3／4

10世紀初頭から1125年までの約200年間にわたってモンゴルの草原から日本海沿岸までの広大な地域で繁栄し契丹(遼)。その3人の皇族女性にまつわる工芸品、装飾品などを中心に契丹文化を我が国に初めて紹介する展覧会。

尊厳の芸術 The Art of Gaman

平成24年11月3日(土)～12月9日(日)
会場：大学美術館展示室1／2

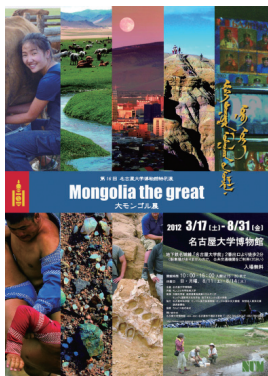
今から70年以上も前に戦争という人災によって、アメリカの日系人たちは収容所に強制的に移住させられて、仮設住宅での不自由な生活を余儀なくされた。しかし人々は生活を少しでも豊かにするために、粗末な道具と乏しい材料で工夫して様々な日用品、装飾品を制作した。その子孫たちに伝えられた「生きる」ために生み出された品々の数々を展示する。本学の後に福島、仙台、沖縄、広島を巡回する予定。

名古屋大学博物館

特別展

大モンゴル展

平成24年3月17日～8月31日



メディアアート展

平成24年8月17日～8月25日

企画展

西條八束と日本陸水学の流れ

平成24年9月11日～11月10日

高木典雄とコケの世界

平成24年11月23日～平成25年2月2日

ボタニカルアートと明治の博物画

平成25年2月9日～3月9日

特別展

クジラの世界(仮題)

平成25年3月23日～(予定)

宮崎大学農学部附属農業博物館

企画展

「新生 宮崎の畜産 口蹄疫を越えて忘れず・活かし・挑む」

宮崎で猛威をふるった「口蹄疫」について、その発生から終息までの取組とそこから得られた教訓に基づいた一般市民も参加する家畜伝染病への新しい取組について、わかりやすく紹介した展示。10月末まで開催



MUSEO ACADEMIAE 第14号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日 平成24年6月
発行者 大学博物館等協議会
編集 〒464-8601 名古屋千種区不老町
名古屋大学博物館 052-789-5767